

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

ね はん え
涅槃会

令和2年2月第2週放送

二月十五日は、「涅槃」に会うと書いて涅槃会です。「生・老・病・死」を自身の思い通りにならないものとして「苦」を示されたお釈迦様が、その生涯の最期にあってかつて苦であった「死」を安らかなものとして迎えていらっしゃる、その様子を指してお釈迦様の最期を、煩悩の滅した理想の境地として「涅槃」と呼びます。

涅槃会では、お釈迦様の安らかな最期を迎える様子を描いた「涅槃図」を掛け、法要を営み、お釈迦様のご遺徳を偲びます。そこには、頭を左にして横になり、身体と顔を正面に向け安らかに目を閉じられているお釈迦様が描かれています。お釈迦様は入滅(にゅうめつ)を迎えるのにあたり、その時を避けるでもなく、また、その時が来ることを願うでもなく、ただ時が過ぎるのに合わせ自身の最期の時を迎えていらっしゃいます。

一方、お釈迦様の周囲には、地上にはお弟子さんを始め、生きとし生けるものが集い空の上にはお釈迦様のお母さまである摩耶夫人のお姿もあり、お釈迦様との今 こんじょう 生の別れを受け入れがたく悲しむ姿が描かれています。

大切な人との別れは、私たちの時間を止めてしまうことがあります。周囲では、これまでと変わらず時間が流れているのに、自分だけは、別れの時から時が止まったように何も変わらずに困惑してしまいます。毎年この時期に掲げられる「涅槃図」を見ていると、絵の中には、変わらずに自分と同じように大切な人を思い悲しむ多くの姿があります。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

お釈迦様は最後の教えとして「もろもろの物事は過ぎ去るものである、怠ることなく励み修行を続けなさい」と弟子達を諭しました。その後、弟子達は修行に励み、お釈迦様の教えである仏教が今日に伝わっているのです。

時間が止まった私たちのことを咎めるでもなく、お釈迦様は、微動だにしないお姿を以て、私たちに時が流れゆくことをお示しになりつつ、私たちとともにそこにおられます。時の経過に合わせてその最期を安らかに迎えていらっしゃるお釈迦様のお姿から、悲しみに出会い私たちの止まった時間が再び動き出す時を、じっと待っていて下さるように感じます。

この度の「涅槃会」の機会に、お寺までお釈迦様に会いに出かけてみませんか？

— 終 —